〔第3種郵便物認可〕

「記憶」凝縮の備忘録

「覚えてる人さ 死んでく」

63年が過ぎ、鮭川村だけで9人が犠牲になった空襲を知る人が次々亡くなっていく。鮭川村京塚で建設会社、山田組を営む山田浩さん(71)は昨年8月、当時を知る人たちから証言を集め、備忘録を完成させた。空を覆う米軍機、機銃掃射で腹を撃ち抜かれた男の子、破壊された石名坂集落……。11ページに、人々の「記憶」が凝縮された。

山田さんの備忘録作りは、昨年3月に69歳で亡くなった元特別養護老人ホーム施設長、黒坂徹さんとの約束がきっかけだった。

石名坂に住む黒坂さんとは、旧豊里国民学校からの幼なじみ。一緒に旅行したり、同窓会を企画したり、付き合いはずっと続いた。

数年前から、黒坂さんは空襲の話をしきりにした。「おっかねえことってのは、忘れられねえんだ。覚えてる人さがどんどん死んでく。今の内に空襲の時の記録さ絶対に作らなんべ」。酔うと、口癖のようにつぶやいていた。06年7月の同窓会で、備忘録を作ろうと約束を交わした。しかし、それから半年、黒坂さんは心筋梗塞(こうそく)で亡くなった。

山田さんは、黒坂さんの遺志を継ごうと、石名坂の詳細な被害を書き留めていた鮭川村石名坂、農業、黒坂英一さん(80)の記録を元に、当時を知る人たちを一人一人訪ねて、聞き取りを始めた。

爆弾が落とされた場所、燃えた家、亡くなった人たち。地図だけで5回は作り直し、あれから62年目の昨年8月10日、ようやく備忘録ができた。一冊は黒坂さんの仏前に供えた。黒坂さんの妻朱(あけみ)さん(65)は「まじめで一人、コツコツ頑張る人だった。徹さん、向こうできっと喜んでいると思います」とほほ笑んでくれた。

◇　◇

今年9月13日、真室川町の温泉に旧豊里国民学校の同級生27人が集まり、担任教諭だった新庄市金沢、新庄東山焼会長、涌井弥瓶さん(79)を囲み同窓会が開かれた。

備忘録は同級生に回し読みされた。「忘れてたが、そんなひでぇこと、あったべな」「こげしてまとめてな、思い出した」「空襲警報聞いて走ったべな」。あの空襲を詳しく覚えている者はほとんどいなかった。

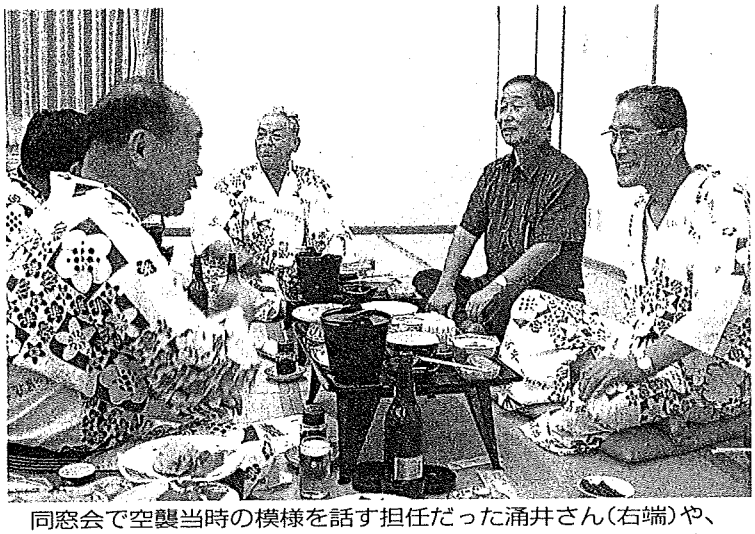
「時が過ぎれば、あの空襲も埋もれてしまう。徹さんと約束したから、完成させないわけにはいかなかった」。山田さんは語る。

涌井さんは、いずれも古希を迎えた教え子に伝えた。「生きてきて、あんなに悲惨なことはねえ。読んだ人が空襲のことを忘れず、思い出してくれれば、うれしい。そしてみんなで平和な時代を作ってほしい」

◇　◇

米軍機から逃げまどい、恐怖におののいた人たちが一人、また一人と亡くなっていく。危機感を抱き、空襲の体験を語り継ごうとする人たちを紹介する。【林奈緒美】

＝つづく



同窓会で空襲当時の模様を話す担任だった涌井さん(右端)や、備忘録を作った山田さん（その左）＝真室川町平岡の梅里苑で

つめ跡は消えても

真室川・鮭川空襲

第3部 語り継ぐ記憶

1

真室川・鮭川空襲

終戦5日前の1945年8月10日、最上地方を米軍機が襲った空襲。県警察史によると、犠牲者は真室川町（当時真室川村）6人▽鮭川村（当時豊里村）9人▽新庄市5人（当時の萩野村4人、八向村1人）――の20人。

小さな棺おけ、鮮明に

つめ跡は消えても

真室川・鮭川空襲　第3部　語り継ぐ記憶　2

「他の人にも、二度とさせたくねえ」

9人の死者を出したとされる鮭川村（当時豊里村）。6人は石名坂集落で、1人が旧豊里国民学校官舎で亡くなったが、石名坂から約3キロ離れた京塚の牛潜地区でも2人が犠牲になった。しかし集落の人さえ、ほとんど知らない。「60年も前のことだ。みんな自分が痛い目に遭ったわけでねえから、そりゃあ忘れんべ。仕方ねえ」。姉といとこを失った農業、三浦政勝さん(68)は、突き抜けたように明るく話す。

1945（昭和20）年8月10日、牛潜の自宅には、当時5歳の三浦さんと母ワカさん、姉ヒロ子さん（当時6歳）らがいた。鶴岡からいとこの大竹進さん（当時15歳）も遊びに来ていた。

突然の米軍機の来襲に、家族は自宅裏の杉林に逃げ込んだが、幼い三浦さんは、杉林手前の小さなほこらに隠れるように言われ、中で一人じっと身を潜めていた。そのころ、杉林では、ヒロ子さんはワカさんに抱かれたまま、機銃掃射に頭を撃ち抜かれ亡くなった。大竹さんは太ももを撃たれ、その日のうちに出血多量で亡くなった。

祖父母から後で聞いた話だ。仏壇の前に並んだ小さな棺おけの記憶だけが今も鮮明に残る。

三浦さんの父は戦死し、ワカさんが家と畑を守り、三浦さんたち子供を育てた。「ひどい時代だった」。ワカさんは時折、思い出したように当時を語った。しかし腕の中で息絶えたヒロ子さんのことは決して話さなかった。

「おれの知らねえところで母親は、いっぱいいっぱい泣いてたと思う」

毎年、8月10日には仏壇に膳を供える。10年前は、住職を呼び2人の亡くなった杉林でお経を上げた。折に触れ、当時のことを話していた長男友也さん(46)は、朝晩、石段を上り、ほこらと杉林に手を合わせる。亡くなった2人のこと、ワカさんの悲しみを思いながら、63年間、家族だけでひっそり供養を続けてきた。それで十分だと考えてきた。

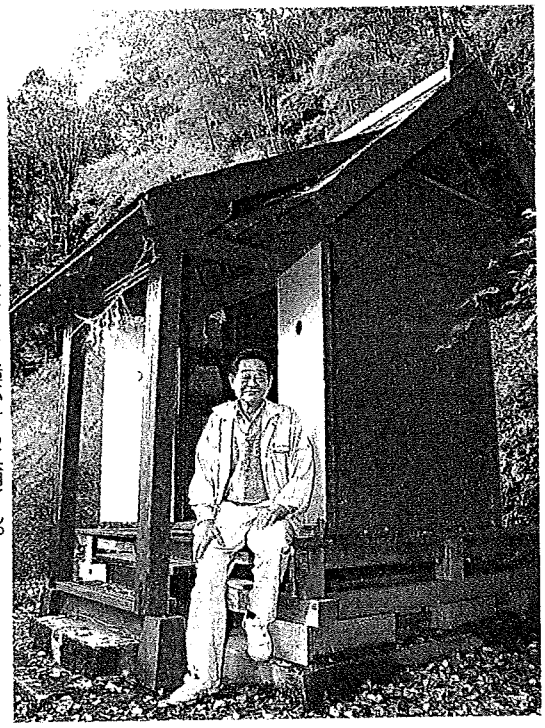
しかし、ワカさんは家族に見守られ14年前に82歳で亡くなった。空襲を知る姉も先に逝き、きょうだいで残ったのは自分だけ。

「本当は、みんなに覚えていてほしい。二度とこんな空襲起こさねえ、って思ってほしい。おれや母親が感じたような思いは、二度と嫌だ。他の人さにもさせたくねえ」。三浦さんは、絞り出すようにつぶやいた。

「でも、どうしたらいいか分からん」。三浦さんは途方に暮れたようだった。

【林奈緒美】

＝つづく



身を隠したほこらに腰かける三浦さん。裏の杉林でヒロ子さんたちは亡くなった＝鮭川村京塚牛潜地区で

◇鮭川村（当時豊里村）で死亡した9人◇

石名坂	北村トシさん	爆弾の破片で翌日
同	荒木武さん	自宅で機銃掃射で
同	黒坂イヨ子さん(18)	爆弾の破片で翌日
同	黒坂泰吉さん(11)	爆弾で吹き飛ばされ
同	松岡さんの男児	自宅で機銃掃射で
同	丸山ケサノさん	自宅裏に落ちた爆弾で
京塚	疎開の男児	学校官舎で機銃掃射で
同	三浦ヒロ子さん(6)	自宅裏杉林で機銃掃射で
同	大竹進さん(15)	同じく杉林で機銃掃射で

（黒坂英一さん、山田浩さん、黒坂専一さん、三浦政勝さんによる、第2部第4回の表を加筆修正）

〔第3種郵便物認可〕

最期の叫び、涙で伝え

「つらいけどよ、忘れたくねえ」

つめ跡は消えても

真室川・鮭川空襲

第3部 語り継ぐ記憶 3

鮭川村石名坂のJR羽前豊里駅前に店を構える手打ちそば屋「千太郎」。元村教育長の黒坂専一さん(57)が妻貞子さん(56)と2年前から営んでいる。昼は打ち立てのそばを食べに来る客でにぎわう。しかし、この地は、63年前の空襲で、専一さんの叔母イヨ子さん(当時18歳)と叔父泰吉さん(当時11歳)の2人の命が奪われた場所でもある。

店は3回改築したが、間取りは空襲当時と同じ。店の屋号は、専一さんの祖父で空襲当時の当主千太郎さんの名にちなむ。店の裏には空襲で大穴が開いていた。今はコイが泳ぐ池になっている。

貞子さんは嫁いだ時に専一さんの母から「一番つらい思いをして亡くなった人たちだけえ、この人たちのことは忘れねえで供養してけらっしゃい」と言われ、毎朝、仏壇にご飯とお茶を供えてきた。とはいえ、詳しい話は聞かずじまいだった。

そば屋を始めてから、イヨ子さんの幼なじみだった無職、黒坂光夫さん(82)が、3日に1度はのれんをくぐるようになった。客のすいた時間を見計らい、いろりで焼いたニンニクをつまみに焼酎を飲み、専一さん夫婦相手にイヨ子さんの思い出話をして帰る。「あんなに悲惨なことはねえ。思い出すとつらいけどよ、忘れたくねえんだ。思い出すために店に行くのかもしれねえ」と、光夫さんは語る。

1945(昭和20)年8月10日、イヨ子さん、泰吉さん姉弟ら9人で隠れていた蔵を、爆弾が直撃した。イヨ子さんは腹に破片が刺さり、泰吉さんは爆風で吹き飛ばされ死んだ。消防団員だった当時18歳の光夫さんは、消火活動に向かう途中で、蔵から逃げようと路地であおむけに倒れ込んでいたイヨ子さんを見つけた。駆け寄ると、イヨ子さんは「おれさ構うことねえ、みんな逃げてけろ」と腹から血を流しながら叫んだという。

「優しくてな、めんごい子だった。あの時の姿思い出すっとな、涙出て来て止まんねっくなる」。いつも、話がそこにさしかかると、光夫さんは涙をボロボロとこぼす。

専一さんは「店を始めるまで、こんなに悲しんでくれる人がいたことも、空襲でイヨ子がどうやって死んだのかも、ほとんど知らなかった」と明かす。

専一さんには2人の娘がいる。既に2人とも大人になったが、イヨ子さんの最期を知り、もし自分の娘の人生が20歳前で絶たれていたら、と考えることが多くなった。

二度とこんなばかげた戦を起こさねえで、と娘たちに伝えたい。

【林奈緒美】

＝つづく

イヨ子さんの似顔絵を眺める黒坂光夫さん(手前)と専一さん＝鮭川村石名坂の「千太郎」で

〔第3種郵便物認可〕

命の重み伝える銃弾

「誰にも言わず死にたくねえ」

つめ跡は消えても

第3部 語り継ぐ記憶

真室川・鮭川空襲

4

空襲から63年後の鮭川村（当時豊里村）。「恵まれた現代の子供たちに、戦争の過酷さ、平和の尊さ、を理解させることはできるのか」。そう悩みながら、子供たちに「あの空襲」を伝えようとする教師や村人がいる。

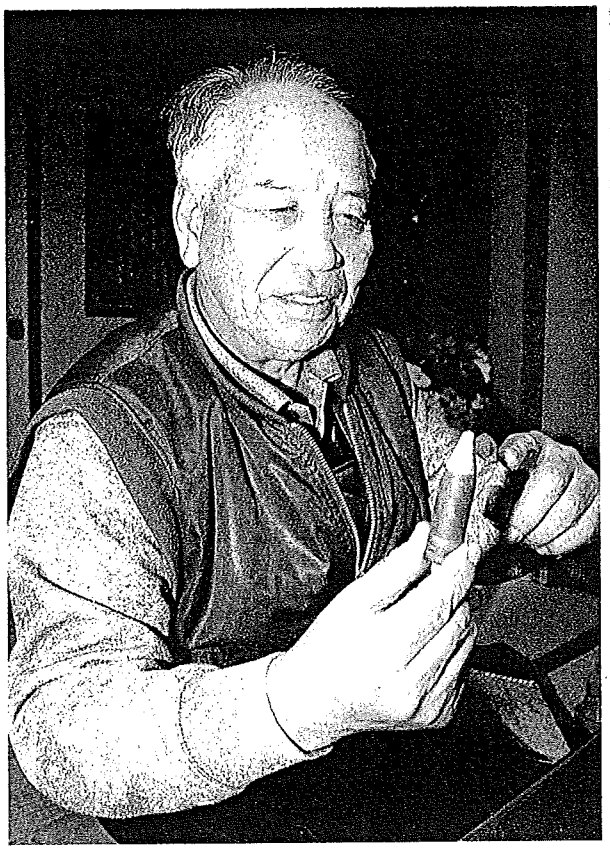
校舎が襲われた豊里国民学校の後身でもある村立大豊小学校の伊東瑞枝教諭(48)は05年秋、小学3年の国語の授業に児童の祖母を招き、空襲の体験を語ってもらった。

授業が終わるころには、20人の子供たちは全員声を出してわんわん泣いたという。「自分のおばあちゃんが殺されていたら、僕もここにはいなかったんだ」「おじいちゃん、おばあちゃんにありがとうって言いたい」――。子供たちはそう話した。

「子供たちに『広島』や『長崎』は遠い。この地で起きたことを知ることで、ひとごとではなく、今の自分が生きている意味を感じてほしかった。それを伝えることが、私の仕事だと思う」と伊東教諭は語る。

小学校の社会科の授業で「太平洋戦争」に充てられた時間は8時間だけ。村の空襲は教科書に載らないので、教師一人一人の判断や努力に委ねられる。

同村京塚の農業、佐藤雄昭さん(74)は、伊東教諭に頼まれ、昨年12月、小学6年生の社会科の授業の教壇に立ち、11歳の時の空襲を語った。



米軍機の銃弾を手にする佐藤さん＝鮭川村京塚の自宅で

爆弾が直撃し焼け焦げた蔵。爆風でバラバラになり亡くなった同級生。駅前の桜の枝には、蔵から吹き飛ばされた着物の端切れが引っかかり、赤、白、青と、まるで花が咲いたようだった。「戦争ってのは、国を滅ぼす。無防備に生きてる人が殺されるんだ。絶対に話し合いで解決してけろ」。最後は、そう言って結んだ。

子供たちが、空襲の恐ろしさを理解してくれたかは本当は分からない。しかし、自分たちの世代が死ねば、空襲のことなど、忘れ去られてしまうかもしれない。佐藤さんは「あの恐ろしい記憶を誰にも言わずに死にたくはねえんだ。絶対に戦争はしてくれるな、孫たちにしっかり、そう伝えていきたい」と信念を明かす。

空襲の時に拾った米軍機の銃弾を佐藤さんは今も持っている。おもちゃのような小さな銃弾は、指で持つとずしりと重い。今度、教壇に立つ時は、子供たちに必ず持たせる。

銃弾の重さ、その銃弾が奪った命の重み。子供たちは考えてくれることだろう。

【林奈緒美】

＝つづく

〔第3種郵便物認可〕

車座で来年、再来年も

「体験した者の責務と思う」

8月3日、真室川町の公民館で、「真室川空襲を語り継ぐ会」が開かれた。輪の真ん中に、真室川出身の元小学校教諭、梨本道夫さん(74)＝山形市吉原2＝の姿があった。年月がたつにつれ、空襲が忘れられていくことに危機感を募らせ、8月10日が近づくと、毎年のように仲間を集め会を開いている。

13人が車座になり、あの日のことを、あの戦争のことを語り合った。「カンカンカンと空襲警報の半鐘の音聞いて、防空壕に走ったべ」「低空飛行でよ、米兵の顔笑ってるみたいに見えたっけ」「家の中にも、銃撃の跡残っておっかなかった」「焼けてしまった家もあったでねえか」

約1時間語り合った後、当時のごちそうを食べた。ご飯にきなこをまぶし、ほおの葉で包んだ「きなこまま」。ほおの葉の香りとともに記憶が鮮やかになってくるようだった。

◇　◇

梨本さんが今も悔やむことがある。銃撃の跡が残ったピアノのことだ。1945（昭和20）年8月10日。当時、6年生だった梨本さんが通っていた真室川国民学校(現在の真室川小学校)も、激しい銃撃を受けた。窓ガラスは割れ、音楽室では、ピアノの黒鍵に銃弾が撃ち込まれた。5年前に卒業生に寄贈してもらった自慢のピアノだった。

真室川小の子供たちは、戦後しばらく、このピアノで音楽の授業を受けた。銃撃で一番低いシのフラットだけ音が出なかった。梨本さんは教師になり母校に3度赴任した。最初の赴任を終えた65年までは確かにピアノはあった。しかし2度目に赴任した81年には、ピアノは新しくなっていた。校長に詰め寄ったが、どこに処分したかも分からなかった。

「ピアノが空襲を伝える貴重な歴史の証言者なんて誰も考えなかったんだなあ。空襲を示す物は、何にもなくなってしまった」。梨本さんはそう言って、肩を落とした。

◇　◇

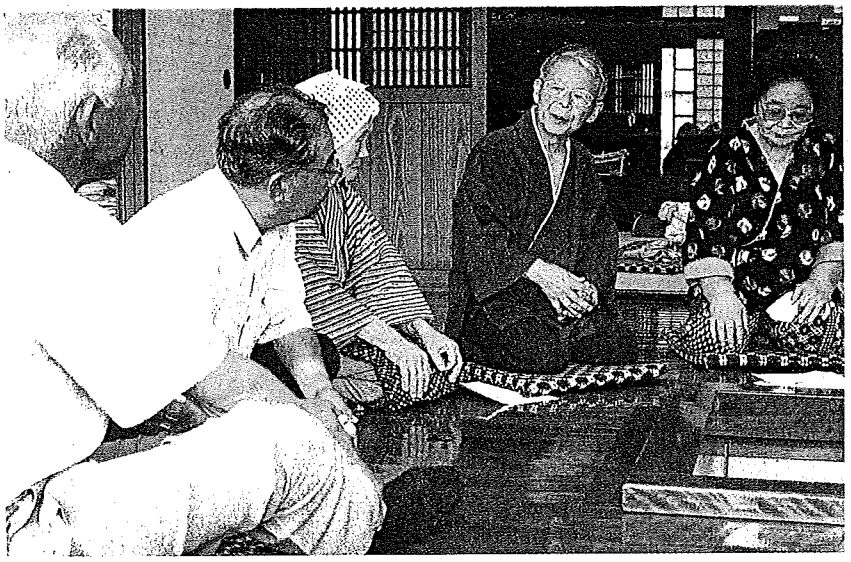
仲間たちと語り継ぐ会を始めたのは、00年。しかし、空襲の恐ろしさを語った人たちは次々と亡くなり、病気で欠席する人も増えた。残り時間が少なくなっている、と梨本さんは感じる。

「何で空襲にこだわるかっていうとよ……。人の命が一瞬にして奪い去られる。こんなべらぼうなことはない。語り継ぐことが、その世代に生まれ、体験した私たちの責務だと思うんだ」と、梨本さんは、語る。

ピアノは失われたが、記憶は失われない。来年も、再来年も、その次の年も、語り継ぐつもりだ。聞いてくれる人がいる限り。

【林奈緒美】

＝おわり



いろりを囲み、空襲を語りあう梨本さん（右から2番目）ら＝真室川町差首鍋のふるさと伝承館で

つめ跡は消えても

真室川・鮭川空襲

第3部　語り継ぐ記憶

5